

富田美樹子

オブジェ作家

2022年11月

富田美樹子独占インタビュー

11月4日から開催の二人展に向けて幾何学模様と抜群の色彩センスで注目を集める富田美樹子さんの独占インタビューを行いました。インスピレーションの源や、作陶生活の中で大切にしている事などをお伺いしました。



一華五葉を開く 茶碗: H10.2 x W14.0 x D16.0cm 台座: H2.0 x W14.3 x D14.3cm

桃青



富田 美樹子 (とみた みきこ)

1972年 大阪府枚方市に生れる

1996年 京都市立芸術大学 工芸科陶磁器専攻卒業

京都市立芸術大学卒業制作展 (同窓会奨励賞 富本賞)

■陶芸を始められたきっかけを教えてください。

精華大学受験時にコースの選択が必要だったので、もともとプラモデル、手芸、工作などの“ものづくり”が好きだったこともあり、粘土を使ってものづくりをするって面白そうだなと思い選択をしたのがきっかけです。その後は第一希望だった京都市立芸大が諦めきれず、再受験をし、転入しました。ただ精華で陶芸をしていた一年が楽しかったので、そのまま陶磁器科を選択しました。

■幾何学模様はどのようにしてスタートしたのでしょうか？

小学生の時、父の仕事の関係で1年程ポルトガルに住んでいました。当時ポルトガル国内やスペインを旅行した際にイスラム文化が栄えていた地域に行くことがあり、そこで初めてイスラム装飾が混じった建物やリスボンのアズレージョのタイルを見て、永遠に続くかのような細密な幾何学模様の虜になりました。その地域の民芸品も込み入った模様の物が多く、すっかり気に入ってしまい、良く父に買ってもらっていました。なのでどんどんそういう模様が身近な存在になっていきました。

桃青

他にはお盆やお彼岸の時期に訪れるお寺の本堂にある密でデコラティブな宗教装飾からもインスピレーションを受けましたね。その他は大学時代にトルコやスペイン、タイなどに友達とバックパッカーの旅に行き、その国の装飾美術を見たことも大きかったと思います。

■昆虫や植物からもインスピレーションを受けていらっしゃるのでしょうか？

そうですね。この工房の周りは今はコンクリートになっていますが、昔は草っぱで、畑もあったんです。なので昔からそこで蟬の抜け殻を解体したり、毛虫の観察をしたりしていました。あとは父の植物、昆虫図鑑、ナショナルジオグラフィック、ニュートンなども見ながら育ちました。昆虫の電子顕微鏡の図や、人体の細胞図など、ちょっと気持ち悪いものを見るのが好きな子でしたね(笑)今でも虫の背中の模様や、女郎蜘蛛の巣の形などは良く観察しています(笑)

■最近インスピレーションを受けたものはありますか？

今までは、宇宙なら宇宙、生命なら生命とどこか偏った作品になってしまう事が多く、作品が出来上がった後、達成感はあるものの、何か足りないと思う事が多かった様に思います。そこで最近、今まで自分が感じていた個別のインスピレーションのイメージを再構築してみようと思ったんです。そうすると生命の進化、不思議さ、人間にはない昆虫の模様や規則性も全て“宇宙”という一つの概念に繋がっていると気がつきました。つまり今まで自分が個別でインスピレーションを受けていたものは実は個別ではなく、全て“宇宙”という同じ感覚で捉えていたんだと思う事ができました。そう捉えるようになってからは作品にまとまりがでてきた様に思います。

■作家として2児の母としてバランスが難しいと思うことはありましたか？

そうですね、展示会などのお声かけは沢山頂くんですが、自分のスケジュールを考えると現実的にどうしても厳しくて泣く泣くお断りする事は沢山あります。これなら何とかできそうだとお受けした場合も、結構いっぱいになってしまう事は多く、余裕をもって仕事のスケジ

桃青

ルールを立てたつもりでも、子どもの予定も入り、結局予定通りいかなることが沢山あります。

40代前半までは自分自身がまだまだ元気で、もっと展示会にも出てガンガン働きたいのに、家の事もしなければというストレスを抱え家族にきつく当たってしまう事もありました。ただ今はできないものは仕方ないし、できない事に対して“何でできないんだ”と自分を追い詰めすぎても意味がない。出来る範囲で取り組む事が家族にとっても、私にとってもベターじゃないかなと思えるようになってきました。50代に入ってから60、70、80と老後の事も考えるようになってきたので、今後の陶芸生活楽しんでいけたらいいなと思っています。80歳まで元気に現役でやり続けるつもりですよ(笑)



(写真:富田さんの工房の様子)

■先生は陶芸教室もされていますがどのようなことがきっかけだったのでしょうか？

こちらの工房はもともと両親が作ってくれたもので、陶芸教室をオープンしたのは26年前ですね。私の作品は一つ一つに時間もかかりますし、数を沢山作れないので作品の収益だけでは足りないのが、教室を始めたのがきっかけです。

桃青



(写真:陶芸教室の看板)

■教室をされていて良かった事はどのようなことですか？

やはり生徒さんと話をすることです。自分の制作をしている時はそちらに集中しすぎて内に内にと入ってしまう事が多いので、生徒さんと話をすることでいろんな事を知る事ができて凄くリフレッシュできますね。またこちらに来られる生徒さんはオブジェではなく日常で使う器を作りに来られるので、粉引きや下絵、練り込みのこととか自分の分野でないところも聞かれる事があります。私も勉強して生徒さんに教えられるように準備をするので、自分と違う分野への理解を深めるのに大変役立っています。ただ私も個展の準備が忙しい時は閉めてしまうので、月謝制ではなく10時から16時まで好きな時にフラッと来てもらうようにしています。一日中いる方もいますし、家事やお仕事が忙しく短時間で帰られる方もいて本当に自由な感じですよ(笑)

■制作をされていて悩むことはありますか？

今までと同じ様に作っているのに急に割れが生じるようになったなどの素材面のトラブルには頭を悩まされます。そういう時は自分で土の配合を変えてみたり、他の作家さんに相談し

桃青

てメーカーを変えてみたりと原因を探します。他の作家さんに相談すると実はそのメーカーさんの土の質が少し変わったなどと教えてもらえる事もあり大変助かります。ただ原因を突きとめたとしても新しい土に慣れたり、調整をしたりと原因に対する対処法も一緒に見つけていかなければいけないので大変ですね。

■制作方法を教えてください。

私の作品は素焼きをして、釉薬を塗って、本焼きをして、一回目、二回目の上絵を重ね、最後に金彩を塗ります。本焼きは電気窯で1230度にして16時間程焼成します。

使う土は技法によって分けますね。手びねりの場合は土の粘りがある半磁土を使い、鑄込みの時は磁器土を使います。釉薬は購入したものや自分で調合したものと両方を使いますね。



(写真:富田さんの電気窯)

■中と外の上絵はどちらから先に行うのですか？

上絵は中から行います。外からやると、中をやっている時に外をうっかり触ってしまうリスクがあるからですね。一個目の上絵の中、外をして、焼いて、2回目の上絵の中、外を行うっという感じです。

桃青



(写真:上絵を行う作業台)

■制作過程で一番難しいところはどこですか？

自分が作りたい形を実現化するのが一番難しいですね。例えば、再現性のある“この抹茶碗の形”を作りたいと思うと手びねりではなくて鑄込みを使わなければいけません。ただ私は鑄込みタイプの作家ではないので、石膏型をとって、何分割にしたら取り外せるのかを考えて原型をつくるという下準備と段取りに大変時間がかかります。私の場合はこういう形をつくりたいというイメージが先にくるので、その為にはどの技法を使うかを後で選ぶ感じになりますね。

大きい作品は基本手びねりですが、それはそれで乾燥するペースを調整しなければ切れが生じてしまうので、鑄込みとはまた別の難しさはありますね。

■今回の個展で注目してほしい点はありますか？

今まで器には特に意味を持たないタイトルを作品につける事が多かったのですが今回の展示会から作品のタイトルにしっかりと意味を込めるようにしました。説明無しに作品を見て伝えられる事は正直限界があると思うので、タイトルを見て作品へ込められた意味を伝えていけたら思ったのがきっかけです。なので作品とタイトルを見ながら、思いを馳せていただけ

桃青

たら嬉しいです。また今回は器に関しては器でありながらも世界感を感じてもらえるように意識して作ったので、そこにも注目していただけたらと思います。

■今回の村田彩先生との二人展ですがどのようなお気持ちですか？

形は違いますが生物的で、デコラティブでインスピレーションを受ける部分、愛読書などが同じなのではないかなと思っています。持っている感性やツボなどが一緒なんじゃないかなと思っています。二人の作品がどのようにギャラリーに並ぶのか楽しみですね。

富田美樹子・村田彩 二人展は 2022 年 11 月 4 日(金)から 11 月 26 (土)まで開催予定です。

皆様のご来廊お待ちしております。

©2022 Tosei Kyoto Gallery. All Rights Reserved